

■ミッドナイト vs ヴィラン育成学園—二限目

◆休憩時間

一時限目のレイプの授業により、気を失ってしまったミッドナイト。気が付くと、その身は教室とは別の部屋のベッドで横たわっていた。凶悪な犯罪組織のアジト真っ只中。どうなるものかと思っていたが……彼らの言う通り貴重な《教材》であるためか、性犯罪を行う以外での扱いは意外に丁寧なものようだ。

「っ……ここは……？」

【あ、気が付いたんですね。ここは実験室です】

「実験……っ?! これ以上、何を……」

【お、落ち着いてください!】

実験という言葉聞き、すぐ臨戦態勢をとるミッドナイト。しかし言葉をかけてくれた者——背格好から、彼もまたヴィラン学園の男子——が怯え、敵意を一切見せていないことに気付き、僅かに肩の力を抜く。

「ふうん……二時限目は《尋問術》の授業、ねえ」

【は、はい……】

寝ている時に着けられたのか、ミッドナイトの両手は手錠がかけられており、両脚にも小型ながら重量のある装身具。“歩いて逃げることはできるが、まとも抵抗な不可能”という状態になっているのだが、それで安心したのか、実験室にはミッドナイトと男子の二人のみ。そして彼は段取りの都合、ミッドナイトに次の授業の説明をする役目を負っているらしい。

「サポート科のキミが作った興奮剤を注射で打ち込んで、そろそろ強制発情するから、その状態で男子の相手をしろ、と」

【は、はい……】

役目のために話す少年だが……彼が他の男子と違い好戦的ではないと知ったミッドナイトは、逆に彼が落ち着くのを待ってから話を切り出す。

「ところでキミ……本当にヴィランになりたいの？」

【えっ? あ、あの、それは……もちろん……】

「……本当に？」

【……………その……………ボクは……………！】

「いいのよ……………話してみなさい」

彼の心情を察したミッドナイトは、笑顔を作って優しく語りかける。

そして、彼が堰を切ったように事情を明かす。

望んでヴィラン学園に居るわけではないこと。

効果的な媚薬を生成するのに都合のいい個性を持っており、

強制的にヴィランとしての活動を強いられていること。

……実はミッドナイトのファンで、酷い罪悪感を感じつつも陵辱される様子を見て

興奮してしまい……………更に、脅されたとはいえミッドナイトが寝ている最中に

興奮剤を打ち込んでしまい、強い自己嫌悪を抱いたこと。

一旦話し終え、泣きそうになる少年を、ミッドナイトは微笑みながら撫でた。

「正直に言ってくれてありがとう。つらかったわね……………」

【え……………？ でも、ボク……………】

「いいのよ。過ぎたことはしょうがないから。

でも……………もしできるなら、キミの信じる正義のために力を貸して欲しいの」

流石に、この学園を相手にミッドナイトだけで戦うのは不可能だ。

いつか他のヒーローが助けに来るだろうが、救出と学園壊滅を成功させるためにも、

もっと学園の情報が欲しい。

その点を相談すると、少年は学園の見取り図を見せてくれた。

【こんなのしかないですけど……………】

「ううん、かなり使える情報よ。ありがと……………っ？！」

【ミッドナイトさん?! もしかして興奮剤の効果が……………】

地理的な情報はかなり有用なものだ。

どこに何があるのか、救助が来るとしたらどのあたりか。

それが知れるだけでも立ち回りが変わってくる。

札を言うミッドナイトだが、そこで唐突に、胎の底から劇的な熱が込み上げる。

少年が作った興奮剤。その効果が発揮されたのだ。

消極的な性格とは裏腹な強い効果に、

ミッドナイトはどっと汗をかきつつも作り笑いを見せる。

「き、キミ……………なかなか才能あるわねっ♥♥

将来ヒーローになれば、製薬会社がスポンサーになってくれるわよっ♥♥」

【ど、どうも……………。その……………大丈夫ですか?】

熱っぽい息を吐きながらも、深呼吸で疼きを抑えるミッドナイト。
次の授業に出る前に、少年に勇気を与えるために握手する。が……

「心配しないで♥♥ 一緒に……乗り越えるのよ……♥♥
そうね……無事にここから出られたら……デートしてあげるわ♥♥ 約束、よ……♥♥」

【うん……ボク、がんばる……！】

ぎゅむっ♥♥

「ああっ♥♥」

【あっ、ごめんなさい！】

手と手が触れ合う……ただそれだけで嬌声を上げてしまう。
体内に直接注入したため効果が強い、というのもあるが、
少年の個性は想像以上に鍛えられているようだ。

(思ったよりヤバいわね……♥♥
せめて救助が来るまで、正気でいられたらいいけど……っ♥♥)

ヴィランに仲間入りを強えられるのも納得する興奮剤の効果。
早くも太股を濡らしながら、ミッドナイトは次の授業へと向かう。

◆二時限目

【せんせー、もうヌレヌレだね。やっぱボクらのチンポにハマっちゃった？】

「そんな訳ないでしょう♥♥ これだから童貞くんは……っ♥♥」

【せんせーをレイプしたからもう童貞じゃないって♪ じゃあはじめるよ、ヨーイ……】

二時限目は《拘束術》と《尋問術》の授業。
手枷、重りといったハンデを背負うミッドナイトを生徒が捕まえ、
拘束して尋問する、という内容だ。
趣旨は違えど、ミッドナイトを輪姦することには変わらない。
男子たちは早くも犯した先のことに意識が向いており、
先程まで童貞だったとは思えない厭らしさを放っている。

(この子たちも……何人かは、不本意にヴィランにされてるのよね……♥♥
彼らのためにも、逃げて時間を稼がないと……♥♥)

実験室の少年からの情報で、やはり全員が望んでヴィランになりたいわけではないようだ。

だが雄欲に駆られた今は理性を失っている。
彼らを正気に戻すためにも、逆転の機を見つけるまで抗い続けるしかない。
校舎の中を走り回り、できるだけ距離を稼ごうとするミッドナイト。
だが、一步踏み出すことにその衝撃が子宮に響き、愛液の足跡を作りそうになってしまう。

(それにしても……このクスリ♥♥ 効きすぎよおっ♥♥)

【お、見つけた！ せんせー大丈夫～？

そんなフラフラしてたらチンポに捕まっちゃうよ～♪】

時間差でスタートした男子たち。ミッドナイトを見つけると、
プロヒーローらしからぬ緩い機動力を嘲って追いかけてくる。
体力の差も予想以上に開いており、なにより興奮剤があまりに強過ぎて、
今にも男子たちの手が届きそうなほど近寄られる。

【逃げないでよー、チンポ欲しいんでしょー？】

「生意気な坊やたちね……童貞卒業したばかりのクセにっ♥♥」

【せんせーこそ、その童貞にイカされといてよく強られるよね】

格闘戦ができるほど詰め寄られ、ジリジリと迫ってくる。
言い返しながら手を躲し、また逃げようとするが、
そこに男子の一人がタックルをかけてきた。
重りがかけられた脚では回避しきれず、足首を掴まれてしまう。

【つかまえ……っつと、足だけか。大人しくしなよせんせーっ！】

「くっ♥♥ このおっ♥♥」

手を振りほどこうと足掻くが、そうすれば
ぷるん♥ ぶるうんっ♥ と乳尻の肉が派手に揺れる。
その際にコスチュームが擦れる刺激でも感じて、
更に牝肉が痙攣する様子まで男子たちに見せ付ける形になってしまう。

【うはっ、超エロいよせんせー】

「は、離しなさいよっ♥♥」

【せんせー、もしかしてわざとエロい抵抗してる？】

【訓練なんだから真面目にヤッて欲しいなあ】

そうこうする内に他の男子たちも近付き、ミッドナイトに次々と手を伸ばす。
これにはもう抗うことはできず、
愛撫の雨を受けてミッドナイトはその場に崩れ落ちてしまう。

「ひっ♡♡ 待って♡♡ 今は♡♡」
(今触られたら……ダメ♡♡ 避けられな……♡♡)
がしっ♡ んひむっ♡ もみもみもみもみっ♡
「っっひっ♡♡♡ ダメ♡♡♡ ああああああああっ♡♡♡」

痛烈なまでの快感に、即座に絶頂。
軽くではあるがあまりにも容易く達してしまい、それがミッドナイトを動揺させる。

(こ♡♡ こんなに♡♡ こんなあっさりイカされるなんて……♡♡
これじゃ……何もできない……♡♡)
【おーイッたイッた。ここまでクスリ効くの？ なんか悔しいなあ】
【ま、チンポでも即墮ちできるよう今から調教すればいいんだよ。
ほらせんせー、尋問室にいくよー♪】
「は……♡♡ 離し……なさ……」
がしっ♡
「んひっ♡♡」

ふやけた身体はあっさりと羽交い絞めにされ、別室へと引き摺られていく。
解放を懇願すれば無防備な胸を揉まれ、唇が引き攣ってろくに発言すら許されない。

(尋問って、何を……これは……ポール……?)

尋問室には天井と床を繋ぐポールがあり、そこに両手を通すように拘束される。

【はい、《拘束》クリアー♪ 次は《尋問だねー》】
「……一体、何を聞き出そうっていうのよ……♡♡」

そして少年たちがニヤニヤと嗤いながら、ミッドナイトに問いかける。

【そんなの決まってるでしょ。さっきレイプされて気持ち良かったんだよね？
今もチンポ欲しいんだよね？ 白状しなよミッドナイトせんせ♪】
「なっ♡♡ 何を言ってるのよ、バカバカしいっ♡♡」

てつきりヒーロー事務所や通っていた学園についての情報を聞き出されるのかと
思いきや、聞こうとしているのはこの上なく下品で下らないことだった。
彼らは単に雄として満たされたいがため、
ミッドナイト本人の口から彼らに都合のいい言葉を言わせたいのだろう。
彼らを救いたいという感情が吹き飛ぶほどの義憤に、
ミッドナイトは双眸を釣り上げて睨みつける。

「男が大勢で一人の女に寄ってたかって……やるのがそんなことなの？！
いい加減になさいっ！！」

【でもミッドナイトせんせー濡れまくりじゃん】

くちゅっ♡

「いひいっ♡♡」

だが、直後に股間を触れられるとすぐに牝の声が出てしまい、
毅然と叱り付けたのが台無しになってしまう。
失神という睡眠を経て、多少の回復はしたものの……やはり興奮剤の効果は凄烈。
しかも屈辱的だが彼らの言う通り、膣内射精快感は牝の本能に焼き付けられており……
敏感な嗅覚が彼らの雄臭を捉えれば、無意識に強い性欲に襲われる。

【ほら、感じまくりじゃん♪ ここでドスケベな本性剥き出しにしてへこへこ尻振ってよ♪】

【ポールダンスしながらチンポ媚びしなよ、正直にさ！】

「ど……♡♡ ドスケベ……ダンス……♡♡ 誰が……そんな、こと……♡♡」

何とも浅ましい要求だが……触れられただけで悲鳴を上げる今のミッドナイトには、
聞いて想像するだけでも胎に欲熱が溜まりそうなほどそそられる行為だ。
たとえここで拒んでも、どうせ男子たちに犯される。ならばいっそ、
救げが来るまで行為を愉しみ、欲望のままに振る舞った方が楽になれるのでは……
そんな考えさえ浮かんでくるが、ヒーローとしての矜持で振り払う。

(ダメよ、言う通りに考えちゃ♥♥ そんなことしたら、本当に墮ちちゃう♥♥

あたしは……ヒーローなのよ……っ♥♥)

【ほら、せんせーどうなの？ やるの？ やらないの？】

【いっそのことラクになろうよ♪ せんせーもそういうの好きでしょ？】

【せんせーのえっちな踊り見たいなー♪】

「だ……♥♥ 誰が♥♥ そんなこと、するもんですか……♥♥

ヴィランの思い通りになんて♥♥ ヒーローは……ならないわよ……っ♥♥」

【仕方ない、ならムリヤリにでも言わせるね♪】

ぼろんっ♥♥

「っっ♥♥」

(ち♥♥ ちんぽっ♥♥)

【あ、今腰がヒクッてなった。やっぱり欲しいんでしょ？】

「そんなこと♥♥ ないわ♥♥ お子様の……童貞卒業したての♥♥ 粗チンなんかっ♥♥」

【ホント素直じゃないなあ、ほらっ！】

「な♥♥ 何をっ♥♥」

がしっ♥ ずりゆうっ♥

「んひいいん♥♥」

男子が近付き、素直に快樂宣言しないとなると巨根を見せ付けてきた。

太く長いそれは一隈目と同様……いやそれ以上に逞しく盛り、

とても童貞卒業直後とは思えない雄の魅力を誇っている。

思わず腰が浮くが、それでも拒絶すると男子が更に近付き……

後ろからミッドナイトの腰を掴んで一気に引き寄せた。

スーツ越しに巨根が尻の割れ目に密着する。

尻肉にペニスを挟まれ、着衣越しでも巨根の熱が伝わって

ミッドナイトは快樂の声を上げさせられる。

【尻コキでも感じてるよ？ 惨めな思いする前に、チンポに屈服した方がいいって♪】

「かっ♥♥ 感じてなんか♥♥ ヒーローは……♥♥ ちんぽに屈服なんてしない♥♥」

【あ、ボクおっぱい触っていい？】

【ボクおまんこー♪】

「ちよっ♥♥ 待ちなさい♥♥ 一度にはっ♥♥」

ぎゅむっ♥ ぐちゆうっ♥

「おおおうっ♥♥ や♥♥ やめなさいい♥♥

男が♥♥ よってたかってええっ♥♥」

更に前や左右からも手が伸び、同時愛撫に嬌声が続く。
男子たちは数十分から数時間程度とはいえ輪姦を通して
ミッドナイトをよく観察・研究しており、同時責めに弱いことは学習済み。
どうすれば感じやすいかも思い出すように触れていき、
しつこくこすり付けられた指の刺激には声を抑えることすら叶わない。

(興奮剤の効き目が強すぎる♥♥ 身体が……この子たちの責め♥♥ 覚えてるっ♥♥

ヤバい♥♥ これ♥♥ 本当に危ないっ♥♥

同時愛撫されてる時に……ちんぽっ感じさせられたら♥♥)

【せんせー、ボクらのチンポも見てよ、ホラッ♪】

ぶるんっ♥♥

「ち……♥♥ ダメ♥♥ 見せないでえっ♥♥」

(ちんぽっ♥♥ 近い♥♥ 届いちゃうっ♥♥)

そこでミッドナイトの心を見透かしているかのように、
手で愛撫する男子たちが性器を露出。
やはりそれらは相変わらずの絶倫巨根であり、
尻コキさせられて腰を突き出す格好になっているミッドナイトは
今にも長い肉剛に顔が当たりそうになる。
匂いも熱も顔面で感じさせられ、愛液がまた一つ溢れてくる。

「ほっ♥♥ ほふっ♥♥ ちんぽ……近付けないでえっ♥♥

それ以上寄ったら♥♥ か、噛み切るわよっ♥♥」

(ちんぽ♥♥ このちんぽの匂いダメ♥♥ これ以上近付いたら……あたし……♥♥)

【口ぱくぱくさせながら言われても……ああ、しゃぶりたいの？

しょうがないな、それっ！】

ずぼおっ♥

「んぐううううっ♥♥」

(ちんぽ♥♥ ちんぽがっ口の中にいいっ♥♥)

そして頭が掴まれ……物欲しそうな唇の中に雄肉が挿入される。
フェラチオ、というよりはイラマチオだが……
無論ミッドナイトにとっては慣れた行為。フェラもまた得意な責めの一つ。
だが噛み切るとまで言い張ったにも関わらず、ミッドナイトは反撃のための吸淫ではなく
雄棒を悦ばせるための舌奉仕をしてしまっていた。
舌で直に味と匂いを知覚し、そのショックが脳天を突き抜けて理性を麻痺させ、
舌肉が勝手に動いてしまっているのだ。
精液を求めて本能が暴走した今、もう少年を責めることなどできない。
ただただ口内、乳首、胸、陰核、秘裂、尻肉……
全身を覆い尽くすような同時快感に翻弄されるのみ。

【あれ、噛むんじゃなかったのお？

まあホントにされても困るけど……ていうかスゴいしゃぶってくるっ！】

じゅぼっ♥ じゅぶ♥ じゅるっ♥ れろおおっ♥

「んぶっ♥♥ んっ♥♥ んうふううっ♥♥」

(ダメ♥♥ しゃぶっちゃう♥♥ 何でこんなに美味しいのよおっ♥♥)

【なんだ、せんせースゴいガッツついてるじゃん！

なに？ オマンコレイプ以外なら何でもいいの？】

【やっぱりチンポ欲しかったんでしょ？ ブチ込まれたら正直になるんだねっ！】

慣れ親しんだ、今となっては好みとも言えるはずの肉棒の味と匂い。

しかし男子のそれは過去の記憶とは全く異なる美味しさであり、

つい夢中になって頬張り続けるほど。

明らかに性感系個性の作用とはいえ、跳ね除けられない自分が恨めしい。

そう思いながらも止められず……そして感じる、口内巨根の脈動。

思い出すのは膣内射精の絶頂快感。

あれを子宮だけでなく舌と喉でも味わえばどうなるのか。

想像するだけで甘い電流が駆け抜ける感覚に襲われ、もう性欲を抑えきれず、

ミッドナイトは全ての責任を発情系個性と興奮剤の効果に押し付けて、

本気の性戯で吸い付いた。